

P2-072

医療的依存度が高い子どもを担当する教員の教育や学校生活への認識と思い

永谷 智恵、佐々木 俊子、矢野 芳美

名古屋大学 保健福祉学部 看護学科

【目的】

人工呼吸器などを使用している医療的依存度が高い子どもを担当している教員の子どもの教育や学校生活に対する認識や思いを明らかにして、医療的依存の高い子どもの教育の場における支援システムの構築に向け基礎資料としていく。

【方法】

人工呼吸器などを使用し医療的依存度が高い児童・生徒(以後、子ども)を担当している教員または担当した経験がある教員に半構成的面接を実施した。インタビューの視点は、医療的ケアが必要な児童・生徒の教育や学校生活の支援に対する考え、思いである。データ分析は、逐語録を作成し医療依存度の高い子どもに関するコードを中心に、類似性と相違性を検討しカテゴリー化した。参加者には研究の趣旨、参加の自由意志、途中辞退が可能、プライバシーの保護などについて口頭と文書で説明し同意を得た。尚、本研究は研究者所属の倫理委員会の承認を得て実施している。

【結果】

研究参加の承諾が得られた教員は7名（男性3名、女性4名）、教員経験年数は、平均23年。担当した子どもは、中学生1名、他は全員小学生。医療依存の状況は、人工呼吸器使用、痰の吸引、胃ろうからの栄養が必要である。分析の結果、＜サブカテゴリー＞16、[カテゴリー] 3が抽出された。

医療的依存度が高い子どもを担当する教員は、＜他の児童と同じ空間で学べる居場所を作る＞、＜子どもの言葉を橋渡し仲間を作る＞など[仲間で育ちあえる環境づくり]を考え実施していた。

体育や音楽などの授業は＜子どもに合わせたカリキュラムを作る＞＜学習方法を工夫して達成感を持たせる＞、看護師と相談して給食を少しずつ摂取させるなど＜看護師とともに学校生活のQOLを高める＞[子どもに合わせ学習内容や学校生活の幅を広げる]を行っていた。

人工呼吸器を使用しているため意思疎通が難しく＜子どもの命の責任と不安感がある＞、経験が浅い教員はこの子への教育が役に立っているのか等＜子どもの将来を見通した教育的アプローチの迷いと葛藤＞があり[教員の責務からくる複雑な思い]を抱いていた。

【考察】

医療的依存度が高い子どもを担当する教員は、子ども同士のかかわりから育つ環境作りを考えて実施するとともに、子どもの医療的依存の状況に合わせ体験出来るような授業の工夫を行っていた。その一方で、子どもの命の危険や不安、教育的アプローチへの不安があることが明らかになり、相談体制作りが求められていた。